

# MA・SO・BO通信

TAKE FREE

2022 11>12

## 寄稿 不要不急じゃない！

ひとり芝居・人形芝居燕屋 くすのき燕

新型コロナウイルスによるパンデミックが起きて早二年半以上の時が過ぎました。その間、舞台芸術は世界中で大きな制約を受けてきました。しかしその一方、その厳しい環境の中で様々な方法を駆使してしぶとく生き延びています。

僕の主宰する人形劇のひとり芝居・人形芝居燕屋もそのように活動を続けてきました。会場を屋外にする。観客席と舞台との間や観客と観客との間を開ける。観客の皆さんとともに色々な工夫をして、なんとか公演をつくって来ました。こぐま座ややまびこ座でも同様だったかと思います。「上演が出来てよかった。観てもらえてよかった。」毎回上演後には、そう感じてきました。と同時に、このコロナ禍の中でも子どもたちに人形劇を届けようとしてくれる大人たちが少なからずいる事に感銘を受け、そのような方たちと共に仕事出来る事を誇りと感じていました。

感染症の拡大と縮小の波に翻弄されながらも、2022年に入ってから少しづつですが上演も戻ってきているように感じています。

### ■特別な上演

さて、時間をパンデミックが始まった頃に戻します。日本中のどの劇団も同じような状況だったと思いますが、人形芝居燕屋では2020年3月から5月までの3か月間は全ての上演がストップしていました。電話が鳴るたびに、またキャンセルかと思ながら電話に出ていました。その頃「不要不急」という嫌な言葉が、時の首相の口から、またニュースの中から聞こえてきました。その言葉を聞く毎に、自分や自分たちの仕事がそう言われているよう感じられ、僕はとてもいら立っていました。それでも、ようやく6月には屋外で行うなどの形で上演が再開しました。

その頃にあるご家族からメールをいただきました。僕の上演を一年前に医大の附属病院で観てくださったご家族からでした。(※)「自宅で公演をしてもらえないか」という内容でした。メールには「脳幹グリオーマという重い病氣と闘う心菜という5歳の娘がいます。病院で観た人形劇をまた観たいとずっと言っていました。遠くても観に行くことができずして、娘の病状が週単位で変化し、コロナもあり連れていくことができませんでした。」という事が書いてありました。少しでも早くというご希望もあり、その上演は6月下旬に実現しました。彼女とその弟とご両親や祖父母。そして仲の良い隣家のご家族が観客。

※その上演は「ゆいの会」主催で行われたものでした。「ゆいの会」は長期入院をしている子どもたちにプロの舞台をプレゼントしようという会です。  
<http://www.yuinokai.net/purpose.html>

彼女は横になったままでしたが、最後まで観ていてくれたようでした。しかし、残念な事に彼女はその約ひと月後に旅立っていきました。

### ■不要不急ではない

これは特別な例かも知れませんが、僕は心菜ちゃんを通じて、「日々変化をしている子どもたちにとって舞台芸術は不要不急なものではない」と確信しました。「僕たちの仕事は不要不急じゃない！」声を大にして、そう言いたい気持ちでした。

もちろん、大人にとってもアートは生きる上で必要なものです。パンデミック初期の2020年3月に、ドイツ連邦政府のグリュッタース文化大臣は「アーティストは今、生きるために必要不可欠な存在だ」と述べ、同国のメルケル首相は文化支援を約束しました。「ドイツ人になりたい！」いら立った日々を過ごしていた僕は半ば冗談半ば本気でそう言っていました。

子どもの事へ話を戻します。子どもは大人に比べ、濃密な時間を過ごしていると考えられています。心理的な時間の密度は、生きてきた時間の長さで反比例するという考え方もあるくらいです。3歳の時間の密度は、30歳の時間の密度の10倍という考えです。そこまではなくとも、子どもの1年は、大人になってからの1年よりも濃い、という感じはわかるかと思えます。また、子どもたちは日々目覚ましいスピードで発達し変化をしています。彼らにとっての昨日と今日は大きく異なるのです。そのような彼らとその折々でアートに出会う事は、大人にとってよりも重要な意味を持つと考えます。

子どもの歩む道端に、アートという名のちよっと変わっていたり光っていたりするものを置いておく事。これは、大人の責務ではないかと考えています。

札幌市では、大人の責任においてこぐま座ややまびこ座という「子どもの劇場」を置き、いつでも子どもたちがアートにアクセスできる可能性を提供しています。これは本当に素晴らしい事です。全国の自治体がこれを見習って欲しいし、わが国におけるその先駆者として札幌市がこの活動を益々盛んにしていって欲しいと願っています。

### 人形芝居燕屋

#### くすのき燕(くすのきつばめ)

NPO法人日本ウニマ[国際人形劇連盟日本センター]副会長 / 日本人形劇人協会会員 / 全国児童青少年演劇協議会会員 / 全国専門人形劇団協議会加盟(人形芝居燕屋として) 1961年 東京都出身、1985年 信州大学人文学部心理学専攻卒業、1987年 ブーク人形劇アカデミー卒業 出演・作・演出・制作・海外劇団の招聘など人形劇の領域を幅広く経験。そのフィールドも、こども劇場・おやこ劇場・幼稚園・保育園・学校・図書館・病院から神社仏閣教会・博覧会・市民祭などのイベント会場、ビデオやテレビと広く、国の内外を問わない。現在、長野県内はもとより、全国で人形劇の上演、ワークショップのほか、映像出演や他劇団の演出を多数行うなどを多面的な活動を展開中。



## 連載 「中島児童会館で育った私の児童劇は 9」

### 「札幌人形劇協議会」冬の祭典で「人形劇」に挑戦 鈴木喜三夫

「やまびこ座」で私は初めて「人形劇」分野へ本格的に挑むことになる。それまでも人形劇をやる母親たちの講座や、遠藤緑(ばびぶ)らの『雪女』(1989年)の演出、芝居仲間の舂井正博(芝居のべんと箱)の『おやゆびひめ』(90年ほか)の脚本などがあつたが、92年、「札幌人形劇協議会(私人協)」に頼まれた『オズのまほうつかい』(ポーム作・広瀬智博脚本)がそのはしり。当時の館長・加藤博が83年、教育文化会館と共に企画した「人形劇フェスティバル冬の祭典」の10回記念である。

当時、人形劇界は社会人・母親・学生に分かれており「～冬の祭典」にはそれぞれが出演したり、合同で創ったりしていた。その殆んどが人形劇人の演出だったが、記念ということで外部から初めて私が起用されたといえよう。

『オズ～』はアメリカでも映画化され、ドロシーと案山子、ブリキの樵、ライオンたちが魔法使いのオズを探して旅する物語。人形劇では新人の私は、経験豊かな人形劇人の援助を受けなんとか仕上げる事ができた。

続いて97年、15回記念では宮澤賢治の『セロ弾きのゴーシュ』(舞台写真)——その脚本を書いた「クラルテ」(大阪)の吉田清治が座の工作室の机にドカッと座り込んで、人形の頭を彫っていた姿がなつかしい。彼と「これからの人形劇はベテラン陣の質向上」で意見が一致したから、キャストは経験者のみオーデションで決めることとした。

チェロの演奏で楽長から注意ばかりのゴーシュは子狸、カッコー、鼠の親子から教わり立派な楽団員になるという話は有名だが、問題はチェロ演奏はどうするか……成長する音を表現するためには力のある演奏家が必要だ。交渉の結果なんと当時の「札幌市交響楽団」の首席チェロ奏者の土田順暲が出演してくれ、みんな大喜び。初演は大成功、99年再び公演した。ただ吉田が96年春、急逝したため本番を見られなかったのは残念。



3回目は2002年、『十二の月たち』(マルシャーク作・原田憲子脚本)。『森は生きている』から王女や宮廷をはずしロシア民話に近い作品である。十二の月の精を人間が演じ、ほかの登場人物を人形にした実験的な試み。これが私の人形劇作品の最後になる。

ほかに1992年に沢則行(人形劇師・チェコ)や「えりっこ」の竹田洋一、絵李古夫妻らと創った『大きな木』(シルヴァスタインの絵本から、鈴木脚本)があるが、劇場は違う児童劇ではない。

「～冬の祭典」は現在も継続されているけれど、元気を失っていることが気になる。ほかの分野の協力を受け、意欲的な作品づくりに挑んでみたらどうだろうか。(敬称略、つづく)

### 鈴木喜三夫 (すずききみお)



1931年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。56年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り59年専門劇団「さつぼろ」創設。86年フリー演出家、2009年「座・れら」を結成、現在に至る。94年北海道文化奨励賞、07年北海道文化賞受賞。04年「北海道演劇1945-2000」(北海道新聞社)上梓。



本の案内人「本シェルジュ」 厳選本の紹介 荒井さん編④

### 『青い鳥文庫ができるまで (講談社青い鳥文庫)』

著:岩貞みこ 出版社:講談社

1980年の創刊以来、小学生に大人気の青い鳥文庫シリーズですが「親になっても読んでいます」という人もたくさんいます。この本は、その青い鳥文庫がどのように作られているのかを物語にしたものです。ゲラやプリプレス、校閲や取次など「どういう意味?」と戸惑う専門用語がたびたび出てきますが、登場人物たちの本にかけられる思いが、読み手をぐいぐい惹きつけます。「と姉ちゃん」(NHK)、や「重版出来!」(TBS系)、「地味にスゴイ!校閲ガール-河野悦子」(日本テレビ系)などのドラマを観てきた方なら、シーンが重なることも多いと思えます。書店の相次ぐ閉店など冷えた話題も多い本の業界ですが、この物語からは熱い気持ちがひしひしと伝わってきます。



### 『北歐式 眠くならない数学の本』

著:クリスティン・ダール 出版社:三省堂

昭和のころの日本では、他の科目より数学の成績を優先したり、教え方も一方的だったり、詰め込み式だったり「生徒を苦しめる道具」のような場面も少なくありませんでした。ですが近年「とっつきやすく面白さを感じる数学」をテーマにした本が次々と登場し、また学校の授業も工夫されてきています。この本はスウェーデンで発行され、世界中の子どもたちに読まれています。もちろん難しいところは飛ばして読んでもかまいません。本来、数学は世界をわかりやすく解き明かし、ひとを平等にし、暮らしを豊かにするための道具なのです。こどもはもちろん、ぜひ、おとなもグイグイと数学に接近して「なるほど!」をたくさん手に入れてほしいと思います。



### 『なぜ僕らは働くのか -君が幸せになるために考えてほしい大切なこと』

監修:池上彰 出版社:Gakken

小中学生のみなさんは「働いている自分の姿」を想像できますか? 江戸時代なら身分や家柄、男女、兄弟の何番目かによって、どのような仕事に就くかがおおよそ決まっていた。しかし、現在では大学に入っても(あるいは卒業しても)「自分がどんな職場で、どんな働き方をしているのか、想像もつかない」という人も少なくありません。2018年に小学校で「キャリア教育の充実」に向けた取り組みが始まりました。キャリアという「出世」とか「実績」と受け止める人もいますが、ここでは「働くことと生き方のかかわり」を指します。つまり私たちは「働くこと」と「生きること」を組み合わせながら、各々が充実した人生をつくりあげる時代に生きているのです。



### 編集後記

先日、市内の養護学校が修学旅行の行先の一つとしてこぐま座に来てくれました。子どもたちが目を輝かせて人形劇を楽しむ姿に触れ、あらためて文化に触れる機会や表現する場として、やまびこ座やこぐま座がその環境をつくることへの責任を感じました。さあ芸術の秋! 10月から特別支援級の子どもたちと人形劇づくり、12月には発達障害の子どもたちと一緒に舞台美術を制作予定です。可能性は無限大! (柳本)

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397  
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886  
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号  
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、MA・SO・BO通信のバックナンバーはホームページからもご覧いただけます。

<https://koguyama.jp/masobo/index.html>

